

## 『大乘義章』『八識義』について

吉津宜英

### 一 はじめに

『大乘義章』は隋代浄影寺慧遠(五三—五九二)の著作である。今、その『大乘義章』のなかでも中心的内容を含んでいる「八識義」について考察する。これまでの「八識義」研究をみると、後代の華嚴学の先駆として扱う立場と、他方インドから中国に伝来した唯識教学の一派として心識説の歴史から考究する立場との、だいたい二つの立場がある。それらは、慧遠の教学を、ある教学の先駆思想として扱い、あるいはある教学への過度的位置にあると規定するから、慧遠の教学そのものの全体的研究としては不十分である。慧遠の教学は、彼が活躍した中国南北朝時代特に北朝(北齊)から隋にかけての学界の動向を無視しては扱えない。そこで慧遠教学研究の基礎作業として「八識義」を取上げ、その教学が南北朝から隋にかけての学界の如何に形成されたかを考えてみたい。そのために、「八識義」の中でも特に対治邪執門

に見られる彼以前の種々の教学批判に注目し、それらの批判を整理しながら、彼の教学形成の背景をさぐり、彼の教学を南北朝から隋への歴史展開の渦中にできるかぎり還元して、その教学の意図を尋ね、ある視点からの先入見を排して自然に浮上ってくる思索の軌跡をたどりたい。

### 二 「八識義」の構成と対治邪執門の内容

「八識義」は積名門第一・弁相門第二・根塵有無門第三・大小有無門第四・真妄依持門第五・真妄熏習門第六・迷悟捨捨門第七・迷悟分齊門第八・修捨分齊門第九・対治邪執門第十の十門分別よりなる。積名弁相の二門を総論とすれば第三から第九は各論で、以上の九門を顕正門とすれば対治邪執門第十が破邪門となる。今特にこの対治邪執門第十に注目するが、他の弁相・真妄依持・真妄熏習の各門にも有人釈を引いて批評するし、慧遠の著作とされる『大乘起信論義疏』(巻下之下、大正四十、一九六頁以下)にも対治邪執門があり、これらをも

考慮して整理する。対治邪執門は(1)事識(六識)(2)妄識(3)真識の三識のそれぞれについて邪執を対治する。まず事識については、六識の一異・断常・有無・心外に心数法(心所法)の有無の八つが邪執とされる。ここでは毘曇(アヒダルマ)と成

実の教学が問題となる。次に妄識については六つの邪執があるが、第一は第七妄識は存在しないという説を破す。ここで第七妄識主張の経証として『楞伽經』と『勝鬘經』とを引く。ここに引かれた『勝鬘經』の「七法刹那不住」の経文の解釈をめぐる、吉蔵は『勝鬘宝窟』(巻下末、大正三七・八三中)で有人釈として慧遠の説を引き、この七法不住を第七妄識存在の証経として引用するのは、慧遠が『摂大乘論』を見ていないからだだと批判する。しかし「八識義」をみると慧遠が『摂論』を見たのは明らかであるから、吉蔵の批判は直接はあたらない。ただ『勝鬘經』解釈としては吉蔵の方がすなおであるから、『摂論』を見た見ないにかかわらず、第七妄識の存在証明を『勝鬘經』に読みとつたところに慧遠の獨創性があり、第七妄識安立の苦心がうかがわれる。次に第七識に別体ありとの説を破す。勝又俊教博士(仏教における心識説の研究 六七八頁)によれば、これは地論宗北道派の説と言われる。第三に七心界中の意根界を第七妄識と考える邪執を破す。第四は微細な第七識を重要な六識所攝の執著心と見誤る説を破す。第五と第六とは第七識の滅不滅の問題を扱い、

第七妄識は終に滅するものではあるが、妄心が真心を熏習する力は不滅であるという。ここでも真妄論と熏習論とが表裏一体であるが、それらの複雑な議論を解く鍵は第七妄識にあることがわかる。

最後に真識については『起信論』の対治邪執と内容的にはほとんど同じだが、二三の問題点があげられる。まず凡夫人の邪執の中で、第一に真識を外道所取の神我と同一視する説を破す所であるが、慧遠は「八識義」冒頭で「いう所の識とは神知の別名なり。」と定義する所からはじめて、処々で神知という語で識を説明する。普通、識(vijñāna)は了別などと訳され、認識の意味を持つが、神知の別名とするとかかなり意味が異つてくるように思う。第八識を真識とし、しかも識は神知の別名と定義しながら、外道の神我と同じではないと主張する。この表現を矛盾なく把握することが「八識義」の思想の根本構理解には不可欠であるが、真とか神とかの概念は老荘玄学の世界の中心概念であり、しかも神滅不滅の論争などの思想戦で種々の角度から論究された。従つて中国思想史の視野から考察しなくてはならない。真識についての邪執で次に問題になるのは真識を空無と執する説を破すところである。『起信論義疏』(一九八上)では空義と法身と真如との三種の邪解をあげるが、「八識義」で空義のみをかかげる。この考えは珍海が『研習抄』(大正七十、六九一中)で指摘す

### 『大乘義章』「八識義」について(吉津)

るように『大品般若経』の十八空などを聞いて邪執をおこすのである。慧影は『大智度論疏』(巻十四、続蔵一・七四・三・二〇五左上)で法空に対して智空を立て、その智空を阿梨耶耶識としている。慧影やその師『二教論』の道安などの大智度論学派(拙稿『北土智度論師について』印仏研十七―一参照)の教学を真識を空無と執する説に對比できるであろう。慧遠はこれに対して真識不空を主張する。

### 三 南北朝諸学派と八識義

南北朝仏教学は諸種の論を中心に学派が形成され、その学派によつて展開した。經典律文の研究はもろろん行なわれるが、研究の主体は論であり、そのような論書偏重の研究態度は一般の人々からも批判されたし、後に『法華経』を中心に教学を展開する智顛も、経よりも論を重んじ、論によつて経を解釈する方法を厳しくいましめる(『維摩経玄疏』)。「八識義」は冒頭で八識は『楞伽経』に出づとしながらも、その主要な教理は『起信論』により、しかも前節にあげた種々の問題点から考えると、南北朝仏教をいるどる諸種の論宗の教学が根底にあることがわかる。

まず毘曇学と成実学について。「二諦義」中の四宗判に見られるように、共に小乗の範疇に入れられるが、智顛や吉蔵のように教論とくつつけて呼称することはない。『大乘義章』

全体は毘曇と成実と大乘との比較研究が主要な内容である。今の「八識義」対治邪執門でも事識の所では毘曇と成実の教学をふまえての議論であつた。中国仏教史における毘曇学は安世高の時代以来古い伝統を持ち、釈道安が学会の長老であつた苻秦時代の長安は毘曇学の全盛であつたが、次の姚秦時代は一転して羅什三蔵による般若空観仏教が盛んで、毘曇学は下火になる。しかし北魏から東魏北斉にかけて鄴都を中心に志念などの活躍で再び毘曇学が興る。成実学は梁の三大法師などによつて成論大乘学として展開され、また北地でも成実学は盛んであつた。後の玄奘三蔵の初期の参学を見ると、これら北地の毘曇成実両学の根強い研究の跡をうかがうことができる。これら両学は慧遠にとつても眼前の時代教学であつた(拙稿『中国仏教におけるアピダルマ研究の系譜』印仏研十九―一)。毘曇成実両教学のアピダルマ的組織と内容が『大乘義章』全体の根底を形成している。今の「八識義」でも特に心意識説に關して慧遠の思索の基盤となつている。

次に勝又博士の御指摘の北道派の説を批判する問題であるが、北道派に属する著作がないので研究を進めることは難しい。これまでのように地論南北二道両派の説の違いを摘出するだけでは限界があり、インドの世親の『十地経論』を所依とする地論教学の歴史と教理との全体性と特殊性とを明らかにしなくてはならない。

次に智度論学について。隋代文帝が勅任した五衆主の中に地論や涅槃とならんで大論衆主があることから大論学の隆盛がわかるし、智顛や吉蔵の教学形成への影響の大きさは先学によつて指摘されている。今問題の「八識義」の成立の背景に大論学があるとは積極的にはいえないが、第七妄識なしとの邪執や、真識を空無とする邪執への批判は、四宗判でいえば第三の不真宗すなわち般若空觀の教学を予想してはじめて理解される。

次に弁相門第二で引かれる有人積(五三二中)が曇延の『起信論疏』の説である点について。『起信論』については撰述翻訳をめぐつて、以前に深刻な論争があつた。それも大きな問題であるが、「八識義」の思想の根幹に『起信論』があることは明らかだし、『起信論』の注釈として曇延のものが慧遠のものに先行することも事実であるから、そこで曇延の注釈と慧遠のそれとの比較検討が必要である。曇延・慧遠・元暁・法蔵など諸家の注釈史をたどることによつて『起信論』の内容の取捨撰択、意味の添加増広が行なわれてゆく過程、その内容の変容に注目したい。先に慧遠が曇延の説を批判する所は三細六麤と心意識との組み合わせにおける意見の食い違いであつて、第七妄識証明のためには慧遠にとつては重要な点であつた。

最後に『撰大乘論』であるが、慧遠の他の著作あるいは

『大乘義章』の他の義門にも『撰論』の引用はほとんどみられない。「八識義」に特に引用がみられる。『統高僧伝』が伝えるように慧遠が長安で曇遷の『撰論』の開講を聴受したとすれば、慧遠の『撰論』の引用することに何の不思議はない。ただ引用があるから地論学の慧遠が新興の撰論学の影響を受けたと速断することはできない。

#### 四 まとめ

以上「八識義」に見られる諸批判を手がかりに慧遠の意図をさぐるうとした。第七妄識の存在が問題解明のための鍵であると考えるが、内容の更に深い考察は他日に期したい。ただ「八識義」の成立が、毘曇・成実・智度論・地論の別流としての北道派・起信論・そして新來の撰論など南北朝時代の各種の論宗を広く批判的に撰取した一種の総合を成しとけたと同時に、それらの諸論宗に対して自己独自の立場を示したと言えよう。従つて研究の方向としては先に列挙した各学派の教学を浮きぼりにしつつ慧遠の教学にひきくらべ、更に同様に南北朝教学の総合と批判をなした智顛・吉蔵との同異を明確にする、縦横の分析が要請される。